高尾山報 令和6年3月号 毎月1回発行 通巻第722号

高尾山報

令和6年3月号

厄を祓い一年の幸福を祈る節分会

法の水茎

大正大学講師　髙橋秀城

(141)

梅が香を
桜の花に
匂はせて
柳が枝に
咲かせてしがな
（『後拾遺集』
中原致時朝臣）

（梅の香りを桜の花びらに匂わせて、そのまま柳の枝に咲かせたい）

春といえば、どのような花を思い浮かべますでしょうか。水仙に菜の花、花桃に辛夷など、「百花繚乱」という言葉があるように、春は数え上げれば切りが無いほどの花々が咲き誇ります。

この「梅が香を」の歌では、春を代表する植物として「梅」と「桜」と「柳」が、季節の順を追って挙げられています。梅の花が散っても、その芳しい香りが桜の花に移り漂い、さらにその梅桜が柳の枝に咲いたなら、どれほど素晴らしい名花となるでしょう。

冒頭の歌はやがて諺となり「それぞれの持ち味の一番よい点だけを一つのところに集めたい」という意味で使われるようになりました。すべてを揃えたい気持ちは分かりますが、それはあくまでも人間の願望に過ぎません。実際には、そのもの特有の性格があるからこそ美しいものです。短い春ではありますが、移ろう満開の桜に梅の余香を感じ、晩春の風に揺れるしなやかな柳の枝葉に梅や桜の面影を重ねることができたなら、まさに夢のような春爛漫の光景がいつまでも続いているように感じます。

さて今月号も、弘法大師空海（七七四～八三五）と年初の地震で大きな被害を受けた能登地方との結びつきについて書いてみたいと思います。

石川県珠洲市の南部、鵜飼海岸（着崎海岸）の沖にある名勝「見附島」は、お大師さまが発見なされた島と伝えられています。太田頼資（？～一八〇七）の『能登名跡志』によると次のようにあります。

昔、大同年中（八〇六～八一〇）、お大師さまが唐（中国）よりお帰りになる途中のこと。どこからともなく『法華経』を読誦する声が聞こえてきました。その声に従って船を漕ぎ寄せると、今の見附島に着きました。

船から磯に上がると、年老いた男が現れ「私の住む山に古木の桜があって、夜な夜な光って吼える声がする」と語ります。男に導かれて山を登ると、『法華経』を読む声の主はこの桜の木でした。そして光っていた物とは、唐から日本へと投げた五鈷杵だったのです。

お大師さまはこの地にお寺を開き、吼木山法住寺と名付けました。また案内した老翁は、白山妙理大権現（白山権現と妙理権現）の化身であったということです。

ここに登場する桜の木は、今でも法住寺の「なき桜物語」として語られており、桜の木に引っ掛かっていたという五鈷杵も今に伝わります。

この話から思い起こされるのは、若き日のお大師さまが唐の岸から投げた「飛行の三鈷」の説話ではないでしょうか（「法の水茎」129）。『今昔物語集』には、三鈷杵は海を渡って高野山上に到達して、檜（別伝では松）の木に突き刺さって留まり、そこから高野山を密教の根本道場と定めたと伝えられています。

密教の法具である「金剛杵」は、独鈷杵・三鈷杵・五鈷杵の三種類で一揃い（三杵）となります。三鈷杵は高野山の松の木、五鈷杵は能登見附島（法住寺）の桜の木で見つかりましたが、残りの独鈷杵は何処に行ってしまったのでしょう。面白いことに、先ほどの『能登名跡志』には、独鈷杵は佐渡の小比叡山（蓮華峰寺）に留まっていたと記されています（一説では柳の木）。

お大師さまが三鈷杵だけではなく、三つの三杵（独鈷・三鈷・五鈷）を唐から投じたという型（話型）は、すでに無住（一二二六～一三一一）の仏教説話集『沙石集』（梵舜本）に見え、「五古は東寺にとまり、三古は高野山にとまり、独古は土佐国にとどまりて」（巻二）と語られています。『能登名跡志』にある、伝承の起源は定かではありませんが、あるいは『沙石集』のような先行する話を基にしながら、東寺を見附島、土佐を佐渡に作り変えて伝えられた可能性もあるでしょう。

現在でも、佐渡市（かつての佐渡小木町）と珠洲市は姉妹都市となっています。直線距離で百キロ強の両市の港は、カーフェリーで結ばれていた時期もあるなど親密な関係を築いてきました。

佐渡の小比叡山蓮華峰寺も珠洲の吼木山法住寺も、お大師さまの開山とされる真言宗のお寺です。両寺院で学んでいた僧侶の往来もかつては盛んだったのではないでしょうか。佐渡と能登をつなぐ航路は、まさに「大師信仰で結ばれた道」であったようにも感じるのです。

吹く風に
浪をさまりて
能登かなる
此国よりや
春の立つらん

（正広『松下集』）

（吹き渡る風に波はおさまって、のどかなこの能登国から春が始まっているのだろうか）

この歌に見られるように「能登」は「のどか」（長閑）に通じます。冷え込んでいるであろう能登地方の方々に穏やかな日常が戻ったとき、希望に満ちた心の春が日本全国へと広がって行くのです。

（栃木北部教区普濟寺）

春を迎え多くの花々が咲き誇る

仲田順和大僧正本葬儀

総本山醍醐寺第百三世座主
大本山三寶院第五十二世門跡
真言宗醍醐派第十一代管長

昨年十一月十日遷化された総本山醍醐寺第百三世座主 仲田順和大僧正猊下の本葬儀が、去る十二月十七日総本山醍醐寺においてしめやかに執り行われました。

葬儀は壁瀬宥雅執行長が喪主となり、総本山御寺泉涌寺長老上村貞郎大僧正御導師のもと営まれました。式には各山山主、宗内御重役、法縁諸大徳、檀信徒等総勢約八百名と共に当山貫首も参列し、亡き猊下の御遺徳を偲ばれました。

参列の皆が在りし日の仲田猊下の御遺徳を偲ばれました

翔龍

今年龍年龍神翔
火龍金龍斷竹荒
人類互愛清龍願
世界和平天龍量

人生は

厚木市　荒井　一雄

荊だらけの
凸凹道
そのうちきっと
良きことあるよ

翔ける龍

本年辰歳ゆる火龍様・金龍様・
青龍様・天龍様各々龍神様
達は破竹の勢ひにて天に
舞ひ上がらん…

戦傷者も罹患者も被災者も
困窮者も各々泣かず、挫けず、
諦めず、くさらず、負けずに
翔龍の如く勢ひ良く
天に舞ひ上がれ…

高尾山節分会追儺式

一陽来復を願って「福は内」

二月三日(土)

師匠の片男波親方（右）と玉鷲関（左から二人目）、玉正鳳関（左）

佐藤貫首と共に歳男と歳女の皆様の記念撮影が行われました

八王子車人形西川古柳座と八王子芸妓衆の皆様

本堂内に響く「福は内」の大音声（だいおんじょう）

女優の丘みつ子さんとWBOアジアパシフィック
ウェルター級チャンピオン・佐々木尽選手も「福は内」

落語家の柳家小さん師匠、
ムッちゃんも豆を撒く

大本堂前にて人気者達から福豆を頂こうと集う大勢の人々

観音菩薩の宗教 ⑦⑤

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

如意輪観音（その13）

密教といえば弘法大師空海のもたらした真言宗とするのが通説であり通念であろう。しかしながら伝教大師最澄の開いた天台宗もまた、日本密教の一大拠点であることを忘れてはならない。東寺（教王護国寺）を中心とした真言密教を東密といい、天台宗における密教を台密と並び称するのは、両者が日本の密教を護持し牽引してきたことを反映するものである。これまで十二回に亙り本連載で見てきた如意輪観音は、大乗仏教の諸尊格のなかでも密教を代表する一尊であり、真言宗がその思想や造形において多大の役割を果たしてきたことは事実であるが、天台宗の如意輪信仰もまた、真言宗と双璧ともいえる意義を有してきた。追って天台宗の如意輪信仰を述べていくが、まずその背景としての日本天台宗の特色を密教の視点から概観してみたい。

そもそも最澄が目指した天台宗は、大乗仏教を幅広く取り入れた総合仏教であった。最澄は出家の決意を示した五箇条の願文の中で、自らを「愚が中の極愚、狂が中の極狂」（大正大蔵経、第七四巻、一三五頁、上段。原漢文）と述べ、それを克服するために出家することを宣言した。この一節は天台の開祖である唐の智顗の『天台小止観』（『修習止観坐禅法要』）にある「偏へに禅定・福徳を修して智慧を學せざるは、これを名づけて愚といひ、偏へに智慧を學して禅定・福徳を修せざるは、これを名づけて狂といふ」（大正大蔵経、第四六巻、四六二頁、中段。原漢文）に基づく見解で、徳があっても学のないものは愚であり、学があっても徳のないものは狂であることを意味する。愚も狂も、コンプライアンスやハラスメントに敏感な現代ではやや強烈な言葉であるが、最澄の用語は自己卑下であって他者への差別の意図はない。そのうえであらためて智顗や最澄の愚と狂の語を考察すると、現代社会の随所にも実例のあることがわかる。人柄は申し分ないが学問のないひと、学力は卓越しているが人格に問題のあるひとがそれである。

最澄はそうした偏向、不完全を超克するため、修行も学問も同等に励まなければならないと宣言した。天台宗において禅や戒律の実践とともに、『法華経』を中心とした経典研究による教学が重視されたのは、その現れである。前者は徳の研磨で、後者は学の研鑽といえよう。このうえさらに密教の研究と実践が加わり、比叡山はすべてを研修する道場であり、総合大学のごとき性格を有するにいたった。

最澄が弘仁十年（八一九）に撰した『内証仏法相承血脈譜』（『伝教大師全集』第二巻、天台宗宗典刊行會、一九一二年、五一三～五六二頁）などによれば、最澄は延暦二三年（八〇四）、還学僧として遣唐使船に駕して入唐すると、天台山の学僧たる道邃や行満から天台教学を学び、国清寺の惟象から密教の大仏頂大契曼荼羅の行事を、禅林の翛然から牛頭禅を授かっている。さらに密教僧の順暁からは密教の灌頂を受け、曼荼羅の書写もするなど、まさに密教僧としての修行に

『伝教大師御絵傳』（彩色木版画『伝教大師御絵傳』、全八枚、昭和四年、延暦寺）における「天台登山」（部分）の図（下村観山画）。筆者蔵。最澄が唐の天台山で道邃より教えを受けている様を描く

励んでいる。こうしたことをもって最澄の天台宗は、円禅戒密の四種相承といわれる。円とは天台宗のことで、当初の名称の天台法華円宗から来ている。また特に、天台と密教の一致は円密一致とも称される。最澄はかかる仏教諸宗のみならず、遣唐使船の出帆前には宇佐神宮に参拝するなど、その思想・行動は宗教的排他性が稀薄にして寛容であり総合的であった。その根拠は、最澄にとって多様な思想の一切は法華一乗に帰するため、すべてが矛盾も齟齬もなく共存したからである。法華一乗とは、あらゆる教えが差別なく一つに融合するとする『法華経』の教えをいい、最澄の基本思想となった。

鎌倉時代に新たな仏教を主唱した宗祖の多くが比叡山で学んだのも、延暦寺が多くのオプションを合わせ持っていたからである。念仏こそが極楽往生の道と説いた法然や親鸞、坐禅こそが悟りへの道と説いた栄西や道元、さらには『法華経』の題目を唱えることこそが救いであるとした日蓮など、後には天台宗とは異る道を歩んでいった高僧たちも、初めは比叡山で修行・研学をしている。全国を遊行し念仏を弘めた一遍は、比叡山で修行してこそいないが、少年時に出家したのは天台宗の教継寺であった。彼らに先立つ平安中期の恵心僧都源信は、日本において最初に浄土思想を体系化した高僧であるが、彼が天台や因明など多様な教学に通じていたことも、九歳より比叡山に学べたからである。まさに比叡山は総合大学であり、特定の学部・宗派に特化した単科大学とは異っていた。比叡山が日本仏教の母山と評される所以である。

延暦二五年（八〇五）、これまで南都（奈良）の伝統仏教諸宗のみに割り当てられていた年分度者に二人の天台僧の得度が認められた。年分度者とは、『僧尼令』にもとづき国が許可した一年の得度者の人数をいう。最澄は二人のうち一人は智顗の『摩訶止観』を、他の一人は『大日経』を学ぶべしと定めた。これにより、顕教と密教を車の両輪とする天台宗の基礎ができあがった。『法華経』や『金光明経』などは全ての僧が学ぶべき必須であったから、比叡山の僧は、大乗の基礎を押さえたうえで顕教か密教かに別れて専門化の道に進むことになった。

これによれば天台宗の二分の一が密教ということになるが、最澄の行動と思想を見ると、数字以上に密教が重視されていたことが推量される。例えば、最澄が延暦二四年（八〇五）年に唐より帰朝して最初に創建した寺院は和田岬（現・神戸）の能福護国密寺（現・能福寺）と名付けられた密教教化霊場であったし、同年、桓武天皇の病気平癒を祈禱した際の本尊は密教の本地仏たる大日如来であった。島地大等所説（『日本仏教教学史』仏教書林中山書房、一九三三年）のごとく最澄生年以前に日本に密教が伝わっていたとする説があるにせよ（那波良晃「最澄撰『内証仏法相承血脈譜』からみえる蘇悉地の伝承について」『大正大学大学院研究論集』二〇一五年、三頁）、最澄が日本における密教の導入者のひとりであったことは特筆すべきである。最澄自身、「法華一乗と真言一乗と何ぞ優劣あらむ」（『伝教大師消息』。『伝教大師全集』第五巻、比叡山図書刊行所、一九二七年、四六九頁。原漢文）と述べていることも注目に値する。

以上のように天台宗は密教の拠点のひとつとなったが、そこには如意輪観音菩薩の信仰や儀礼も含まれており、その起源は最澄に求められる。上述の如く最澄は在唐中、天台教学のみならず禅や戒とともに密教も学んでいる。そのなかに明州檀那行者の江秘から授かった普集会壇と如意輪壇とがあった。壇の原語はサンスクリット語のマンダラ（mandala 曼荼羅）で、密教の尊格を招くため結界された場所をいう。曼荼羅には土の壇の上に作るものから、絵画として描かれるものなど多くの種類がある。導師は曼荼羅に臨んで口に密呪を唱え、手に印を結び、供物を捧げるなどして供養する。その修法は壇法とか作壇法と呼ばれ、尊格により種々に規定されている。最澄が江秘より教えを受けた普集会壇と如意輪壇の詳細は明確ではないが、最澄はここで密教の尊格としての如意輪菩薩を学んだことになる。

その後、天台宗の如意輪信仰が広く展開していくのは最澄の弟子の円仁によるところが大きい。次号ではそのことについて述べることとする。

高尾山涅槃会

二月十五日（木）

お釈迦様が入滅されたと伝わる二月十五日、高尾山上にて釈尊涅槃会が行われました。

初めにお釈迦様の真身舎利が納められる有喜苑・仏舎利塔内において佐藤貫首導師のもと法要が営まれました。この真身舎利はタイ王室を通じ、タイの寺院、ワットパクナムより、青少年の健全な育成を願い分贈されており、昭和三十一年より高尾山の地に奉安されております。

その後、高尾山書院内に飾られた「高尾涅槃図」の前でお釈迦様の御遺徳を偲び懇ろに御供養されました。高尾涅槃図には、お釈迦様が入滅された時の様子が描かれており、天狗や紅葉の木なども描かれております。

高尾涅槃図の前にて御供養致しました

初午福徳稲荷祭

二月十二日（月）

去る二月十二日、飯縄権現堂（御本社）脇の福徳稲荷社において佐藤貫首導師のもと高尾山初午福徳稲荷祭が行われ、商業繁昌・五穀豊穣などが祈願され、参列の御信徒の皆様と共に祈りが捧げられました。

初午の法要は、京都伏見の稲荷神社の祭神が、和銅四年（七一一）の二月最初の午の日に降臨し鎮座されたと伝わるため、毎年初午の日に行われております。

大勢の御信徒様と祈りを捧げました

高尾山薬王院中興第三十一世 山本秀順大和上ご命日

二月四日（日）

二月四日は先々代貫首・山本秀順大和尚の御命日にあたります。

大和尚は平成八年二月四日、世寿八十四歳にて遷化されました。

暦の上では春を迎える立春のこの日、歴代先師墓地において佐藤貫首導師のもと、亡き大和尚の御冥福を祈り墓前に香を手向け、懇ろに御回向申し上げました。

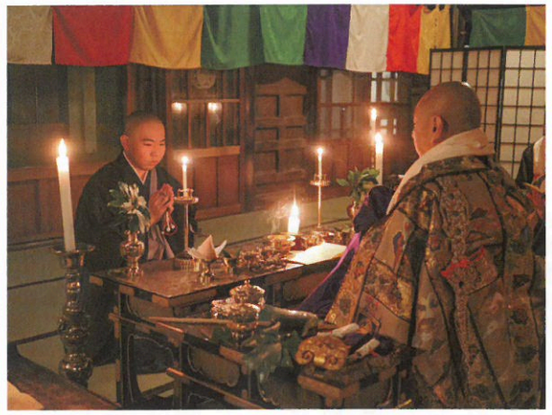
亡き師を忍び香を手向けられました

得度式厳修

二月二十一日（水）

霧に包まれた早朝の高尾山大本堂に於いて、佐藤貫首戒師のもと、新たに仏門に入り僧侶となるための得度式が執り行われました。

得度者は東京多摩教区・眞福寺住職・岸本俊一法資・岸本泰宗さん（十八歳）です。今回戒律（十善戒）を授けられ、新たに仏門に入られる新発意の、今後様々な修行での精進を願うものであります。



僧侶としての戒を授けられる得度者

高尾山浅草分霊院大祭

二月十一日（日）

寿一丁目町会の皆様と共に、
諸願成就をご祈念致しました

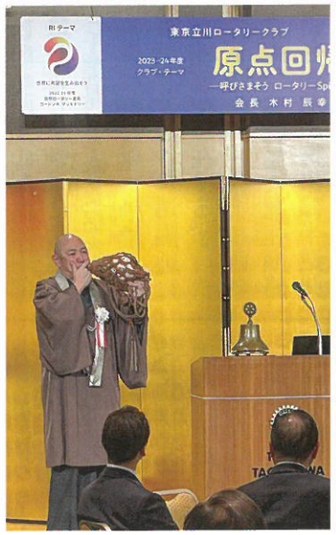
高尾山浅草分霊院において、佐藤貫首導師のもと例大祭が執り行われ、分霊院を管理して頂いている寿一丁目町会の皆様がご参列の中、諸願成就をご祈念致しました。

浅草における高尾山信仰の歴史は江戸期に遡り、明治大正期には非常に賑わいを見せておりました。

しかし戦災による堂宇焼失後も変わらず信仰され、地元有志の尽力により、昭和四十五年に分霊院として再建されました。

東京秋川ロータリークラブ 東京立川ロータリークラブ 当山貫首卓話

二月十五日と十六日、両日に渡りそれぞれ東京秋川ロータリークラブと東京立川ロータリークラブにおいて佐藤貫首による卓話が行われました。秋川では「あきる野ルピアホール」、立川では「ホテル日航立川 東京」において、「霊気満山 高尾山～何故この山に人が集うのか～」と題し、当山貫首が信仰の道場としての高尾山の歴史、また修験道についてお話しされました。



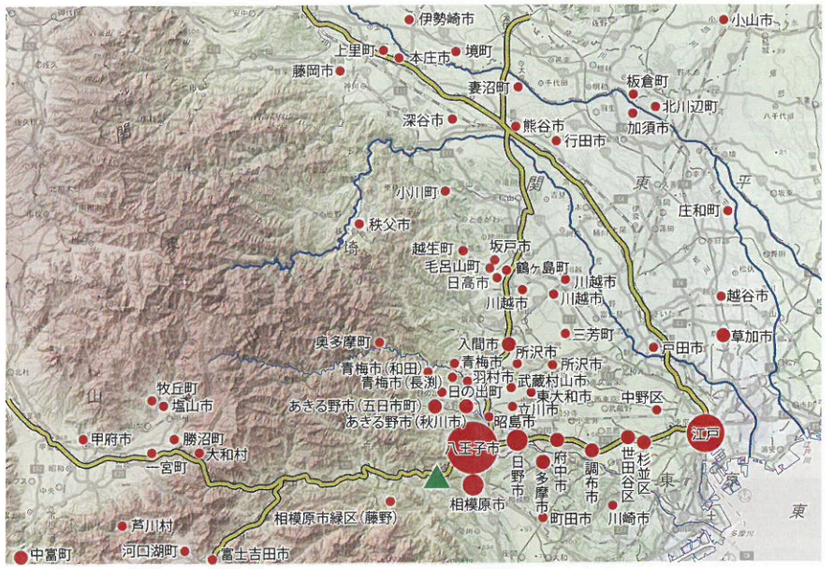
東京立川ロータリークラブ（左）と
東京秋川ロータリークラブ（右）において
「生命の力が満ちる山」として高尾山を紹介されました

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる 51

明治大学博物館　外山　徹

十八世秀神9
護摩札配札と信仰圏の拡大（下）



『地図中心』587号特集高尾山（2021年8月）から転載
山梨県域は合併前の町村名を表示

文化六年（一八〇九）成立の「江戸田舎日護摩講中元帳（以下「元帳」と略す）」に記された護摩檀家の分布は、その時期の高尾山信仰圏を想定する指標となる。そして、その拡がりがいかなる契機によるものか、考察する素材として「元帳」は大きな史料的価値を持つ。

護摩檀家の分布

「元帳」は四〇年近く使用されたらしく、その間の加筆抹消はおびただしい。そのため檀家数という点で算出が難しいが、ほぼ確定できる作成当初の筆跡を数えると約千二百名となる。現在の八王子市域と神奈川県相模原市西北部に約半数強、その内の三分の一が八王子宿の在住者。江戸が全体の四分の一で約三百名。さらに四分の一の三百名弱がそれ以外の地域在住となる。高尾山周辺と江戸を大小の核とし、付図にある通り、北は上野国（群馬県）南部、西は甲斐国（山梨県）中部に分布し、さらには上総（千葉県）、下野（栃木県）、陸奥（福島県）、信濃（長野県）といった遠隔地にも檀家が点在する。

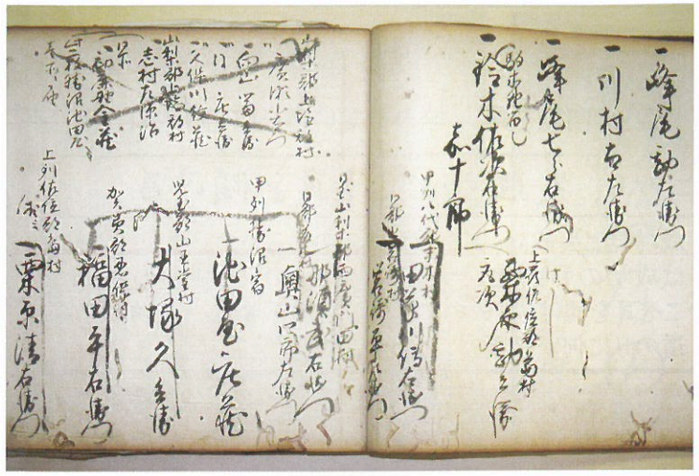
ところが、約千二百名の内、前回見た配札順路に名が並ぶ檀家は半数強に過ぎないのである。それ以外の檀家はどのように年三度の札を受けていたのか？「元帳」の冒頭にある「心得の事」という一文は護摩檀家（帳簿上は施主と表現）を「上に一印これ有る施主」と「取次とこれ有りそうろう下段の施主」の二種に分けている。「下段の施主」とはページ上段に記された檀家名の下に「取次」とあって、続いて書き記された人々である（写真）。取次とは文字通り他者に札を仲介することだろう。すなわち、ページ上段に記された「上に一印これ有る施主」が薬王院から直接配札を受ける人々であり、それ以外の檀家は「取次とこれ有りそうろう下段の施主」として記載されているのである。なお、江戸においては原則全ての檀家に直接札を届けており、上段・下段の区分は身分の別を表している。

護摩札の取次

やや込み入った説明でわかりにくかったと思うので、その具体相を見てみよう。写真のページでは、高尾山最寄りの上長房村駒木野宿（八王子市裏高尾町）在住で「上に一印」の鈴木佐次右衛門が直接配札を受けるが、鈴木の名の下には「取次」とあり、甲州八代郡末木村田草川伝右衛門、同郡上岩崎村岩崎平左衛門、同国山梨郡西広門田村那須武右衛門というように「下段の施主」の名が連なっている。つまり、田草川以下の檀家は鈴木を介して配札を受けるわけである。

取次をおこなう者は八王子宿の三〇名を最多として、前回見た配札順路

上の村々や甲州道中上の宿場に在住している。この取次のあり方は、鈴木のような遠隔地への取次と、自村や近隣の村々への取次という二通りに分かれ、この傾向は取次をおこなう者の在住地によって分かれている点を指摘できる。後者については、日常の通交圏において、高尾山を信仰する



「江戸田舎日護摩講中元帳」法政大学多摩図書館寄託

前者については駒木野宿から甲斐国、あるいは上野国南部というような、二泊三日ないし三泊四日の行程を要する遠方への取次となる。しかも取り次ぐ札数はそれほど多くなく、札を届けるためだけの往来があったとは考えにくい。

こうした取次をおこなう者は駒木野宿や同村小名路宿、また八王子宿の在住者であり、甲斐・上野方面から人や物資の通行のある場に住んでいることからすれば、商用による恒常的な往来が札を取り次げる理由であったと考えるのが自然である。あるいは、高尾山信仰がその往来を媒介していたと考えられなくもない。

札の取次によって結ばれる人と人との関係を丹念に拾ってみると興味深い動向が読み取れる。上野国在住の檀家には蚕の卵である蚕種の取引に関わる者が目につく。また、武蔵国中部の入間郡在住の檀家には織物や生糸の売買に関わる者を見出すことができた。一方、甲斐国については、檀家の生業こそあまり明確ではないが、その在住地は養蚕地帯であり、ぶどうやたばこなど商品作物の産地である。そして、それらの地域から甲州道中を江戸方面へ運ばれる荷物を駒木野宿の問屋が中継していたことがわかっているが、前出の鈴木や他に広瀬宇兵衛はその問屋である。取引をする者同士が俳句などの文化活動を共にすることで、信頼関係を醸成したことが指摘されているが、同じ神仏への信仰もまた、そうした意味合いを持つだろう。

武蔵南東部の空白

図を見てわかる通り、護摩檀家分布の南方への伸張が鈍いことは一目瞭然である。この時期、武蔵国荏原郡馬込村（東京都大田区）を拠点とする馬込元講の活動がわかっているが、「元帳」にそのメンバーの記載がない。「元帳」に欠落部分があるか、あるいは現在の品川・大田から川崎・横浜にかけての一帯は、在村の先達が率いる馬込元講に配札が委ねられていた可能性もあるだろう。

相模平野方面への拡がりがなかったとすれば、理由としてやはり高尾山信仰の伸張と甲州道中・日光脇往還という交通路との密接な関係が考慮される。取次の関係は全てが全て前述の傾向に収斂されるわけではなく、また、檀家圏の拡がる地域として絹・生糸をはじめ商品作物の流通に信徒集団が関わることはむしろ自明のことであるが、関東南西部における交通・流通の結節点に立地しているが故に、そうした性格が付与されたことには間違いない。

寛政から文化の頃、江戸周辺部の地域市場に対する江戸問屋の支配が弱まり、地域間の商取引が活性化したと言われる。取次関係形成の背景として考えられるだろう。

《参考文献》白川部達夫『江戸地廻り経済と地域市場』（吉川弘文館、二〇〇一）、杉仁『近世の地域と在村文化』（吉川弘文館、二〇〇一）

おことわり　本連載では史料の引用について、適宜、読みやすく原文に手を加えています。

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

二十六段　失敗話にこそ耳を傾ける

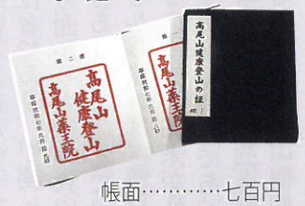
成功話と失敗話、どちらも価値のあるものですが、「失敗は成功のもと」という言葉にあるように、戒めの言葉にこそ耳を傾け、失敗の本質から教訓を学び、「成功までの道のりに何が必要か」ということを考えてみましょう。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、今では約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみ下さい。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。



帳面……七百円
スタンプ……百円

高尾山 季節散歩

和風月名　弥生「やよい」

暖かな春の日差しを迎え、草木がいよいよ茂るという意味の「木草弥生い月（きくさいやおひづき）」が詰まって、「弥生」と変化したとされております。

厳しい冬を耐えてきた植物も動物も生命力に満ち溢れ、お山も次第に賑やかになってきます。

今月の風物詩　春の社日

「社日」とは雑節の一つで、土地神様である「産土神」に感謝を捧げてお祀りする日です。産土神はその土地で産まれた人々の一生を見守って下さる神様です。

社日は春秋で年二回あり、春の社日には五穀を供えて豊作を祈願し、秋の社日には収穫を感謝します。

健康登山者投稿作品　季節の絵手紙

八王子市　峰尾　里枝子

「ひなまつり」

「桜花咲き散る」

いけばなの心 ㊾

華道教授　佐藤　宗明

花材：松・寿松・若松・桧・山茱萸・柘植・正木・椿・伊吹・中菊・小菊・アイリス・なでしこ

『春がやってきた！』三月に入ると外に生えている植物も新芽を伸ばし、花を咲かせ、そんな気分にさせてくれます。

今回は先日、いけばなの展覧会（花展）で披露した作品をご紹介します。この連載ではいつも、池坊の生花をご紹介していますが、この作品は立花という花形の作品です。その中でも出どころが二つに分かれ、表面に砂を見せることから『二株砂物の立花』と言います。

松の枝を主体として、立ち枯れた枝『曝木』を入れる事で年月を重ねたものがもつ迫力を出しています。木が主体の作品ですが、要所に菊やアイリス、ナデシコを入れることで山中に流れる清水のような瑞々しさを表現しました。生花と違い、立花は多くの花材を使用して森羅万象を表現する、と言われる生け方です。制作には時間がかかりますが、見る人に強い感動を与えてくれます。

高尾山の昆虫　クロカナブン　173

高尾山にはカナブン、アオカナブン、クロカナブンの三種のカナブンが生息していて身近な存在ですが、そんなカナブンは数年前まで幼虫が発見されていなかったという謎の部分も併せ持ちます。

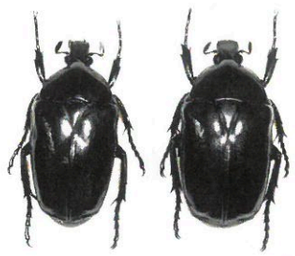
一番遅い時期に出現するのはクロカナブンで、黒色で光沢が強くエナメルを塗ったような雰囲気があり独特の存在感があります。

平地の雑木林では圧倒的にカナブン、やや標高がある場所ではアオカナブンが多く、クロカナブンにはレアな印象を持つ人も多いと思われます。

私自身も幼少の頃は希少性を感じていましたが、晩夏に数を増す種であり、その時期に見回れば多数の個体に出会うことができます。

特筆されるのはその大きさで、八重山諸島に産する大型種のサキシマアオカナブンよりも大きく日本産最大のカナブンです。

体が大きいばかりでなく脚も長く、とても頑健そうな見かけですが、実際他のカナブンは元より強敵のカブトムシ、ミヤマクワガタ、スズメバチがいても怯まず場所を譲らない逞しさがあり、このメタリックな重厚感はそれを体現しているかのように感じます。



（撮影・文　松島　孝）

おはなし散歩道

たった一言だけど

八王子市　池田美絵

（間に合うかな、間に合ってほしい！）。カオルは七時から始まる朝練に出るために、駅の階段を全力で駆け下りた。あと五分早く起きればあわてることはないのだが、このタイミングになることが多かった。

カオルは高校三年生。音楽部に所属している。一月に開催される演奏会は、高校三年間の集大成であり、ある曲では自分が担当するクラリネットが主役だった。

だが、テンポが速い上に、細かな音符が続くので合わせるのが難しい。その点を指導の先生から厳しく指摘されていた。カオルは少しでも上達しようと練習に励んでいたが、芳しくはなかった。

カオルが利用する駅は、ホームの両端に階段がある構造で、カオルは階段を下りると電車の最後部から乗ることになる。ある朝のこと、電車に駆け込むとドアが閉まる直前、「いってらっしゃい！」という男性の声が聞こえた。

（ホームに知り合いがいたのだろうか。でも、私一人しかいなかったから、もしかして車掌さん？）。電車の中からガラスで仕切られた車掌室を見ると二十代ぐらいの若い人が立っていた。その後も何度か「行ってらっしゃい！」が聞こえてきたので、同じ車掌さんが声をかけてくれているのだと思った。

本番まで一カ月となり、練習は日ごとに熱を帯びる。一週間後にプログラムどおりにリハーサルをすると発表され、カオルに緊張が走った。（本番さながらの状況でミスをしたら私は下ろされるに違いない）。

リハーサル当日の朝になってもカオルはまだ自信がもてなかった。重たい気持ちでホームで待っていると電車が滑り込み、あの車掌さんが乗っていた。ドアから身を乗り出して「いってらっしゃい！」と声をかけてくれる。細い目をいっそう細くして笑っていた。

カオルに温かなものが込み上げた。その一言が力強い励ましに聞こえ、（自信をもって演奏しよう）と心を定めることができた。

そうして迎えたリハーサルで重要なフレーズを吹き終えた時、先生が胸の前で小さくオーケーのサインを出してくれた。

演奏会本番も成功裏に終わり、カオルたち3年生は部を引退した。通学路に春の気配が漂う季節となり、仲間の一人に車掌さんのことを打ち明けると、「いい人だね。お礼の手紙を書いてみたら」と勧める。カオルも改めて車掌さんへの感謝が湧き、仲間の言葉に従ってみた。

卒業式が間近に迫ったある日、カオルは担任の先生から一通の手紙を受け取った。驚きながらも鉄道会社のロゴがついた封筒を開いた。

「お手紙ありがとう。最近見かけないなと思っていたら引退されていたんですね。お疲れさまでした。小さな楽器ケースを持っていたから音楽をしているのかな、と思っていました。実は私も学生時代にスポーツをしていて、あの時の厳しさが今の自分を作ってくれたと思っています。だから夜が明けない前から登校するあなたを応援したくなりました」。そして手紙の最後はカオルへのエールで結ばれていた。

カオルはその手紙を胸にいだき、四月からの新生活を思った。どこまでも青い空が広がっていた。

（挿し絵・小出　茂）

高尾山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のように二つのグループに分け、途中（山上十一丁目茶屋前第十七番札所）で合流し、一緒に巡拝いたします。

A、不動院から琵琶滝を経由して薬王院まで歩く

B、ケーブルカーを利用する

（琵琶滝周辺のお大師様は巡拝できません。また、ケーブルを利用する場合代金は自己負担になります。）

日　程　五月十四日（火）

行　程　山麓不動院→琵琶滝→仏舎利塔→本堂（護摩修行）→大師堂（法楽）→坊入（昼食）→一号路（下山）→不動院（解散式）→解散

参加費　五千円（昼食代・保険料含む）

集合場所　山麓不動院（八時半集合）

定　員　四十名

お申し込み開始は四月中旬頃となります。詳細は来月号又は当山ホームページにてお知らせ致します。

高尾山報助成金志納者御芳名（順不同・敬称略）

八王子市　金南寺
小平市　関道雄
新座市　彰山粧麗
加須市　野本新藏
羽生市　増田久雄
伊勢崎市　赤万字講
鴨川市　浄照寺
仙台市　佐々木美枝
狛江市　熊澤利久
高崎市　小暮典子
八王子市　上村秀如
板橋区　宍戸光男
宮崎市　田﨑恵子
船橋市　佐俣純義
八王子市　石井忠明
藤岡市　櫻井泰男
八王子市　永見得二
行田市　竹村宏巳
八王子市　秋山論
調布市　星野康太
さいたま市　出口利男
野田市　福田静司
香取郡　石橋秀一
八王子市　菊地義明
あきる野市　南波和子
横浜市　大江泰子
桐生市　石原庸右
八王子市　常盤正
東筑摩郡　竹内政男
新潟市　金子憲子
府中市　峰村菊子
八王子市　齋藤善法
三島市　日吉哲也
所沢市　木村久子
相模原市　比留間榮子
熊谷市　妻沼飯縄講
〃　石井淳
世田谷区　塚越絹代
日野市　池田久恵
富里市　森照森
江東区　掛川昌通
八王子市　齊藤みゆき
〃　吉田利江
高崎市　萩原始
邑楽郡　松村静雄
足立区　中山恵司
江東区　冨永ナオ子
船橋市　神田みつ江
千葉市　諸石勝次
東久留米市　渋井千秋
川越市　倉橋夏子
八王子市　佐戸正幸
〃　秋山重男
港区　吉田貴喜
八代市　庄司和子
板橋区　尾崎ふみ江
日野市　岡田志美子
江東区　地引壽雄
八王子市　小池まり子
千代田区　金井昌敦
高尾山健康登山者一同

いろは天狗の落し文 ㊳

き

規則守れば
心は荒れぬ
歩み行きます
人の道

規則正しい生活を送るとは、時に息が詰まることもあるでしょう。それでも規則を守るというのは、「皆様と歩調を合わせて生きていきます」と宣言することだと考えております。規則を守るとは、人の道を歩むことに繋がることでしょう。

登山だより

四月行事日程

一日
滝びらき

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

十一日、二十三日
弁天秘供

八日
花まつり（仏舎利塔）

九日、二十三日
御詠歌勉強会
（十時山麓不動院）

二十七日
月例写経会
（十三時山麓不動院）

二十八日
奥之院開扉供養
（十時奥之院）
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）

二十一日
高尾山春季大祭
大護摩供法要
（十二時半大本堂）
柴燈大護摩供
（十三時有喜苑）
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

○御本尊様の日々の御加護に感謝し、百味のご供物を捧げて供養する法要です。
皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。
尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。
御志納金　一口三千円以上

毎日のお護摩奉修時間

午前9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

高尾山春季大祭

四月二十一日(日)

稚児装束の可愛らしいお稚児さん達

高尾山春季大祭お稚児募集

昔から「子宝」という言葉がありますように、ご家庭は子孫の成長によって、子子孫孫に受け継がれ発展していくものです。私達が次代を託するという意味では、子供は文字通り宝であります。

皆様方のお子様が高尾山御本尊飯縄大権現様の御加護の下、健康に、逞しく成長されますよう、お稚児練り供養にご参加をお勧め申し上げます。

定　員　五十名（定員になり次第締め切らせて頂きます。）

参加料　お稚児　七千円　付添人　千五百円

お申込・お問い合わせは高尾山お稚児係まで
☎〇四二―六六一―一一一五

高尾山報助成金御志納のお願い

当山では、大護摩修行等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報を送っております。

引き続いてご愛読されますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　犬山秀康
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
https://www.takaosan.or.jp
下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます